



# 自由學校

獅子文六

朝日連載文藝作品

昭和二十六年一月二十日 印刷  
昭和二十六年一月二十五日 発行

自由学校

定価 二〇〇円

著者 獅子文六

東京都千代田区有楽町二ノ三  
朝日新聞社

印刷兼発行者 杉山胤太郎

東京都丸ノ内・大阪市中之島・小倉市砂津  
発行所 朝日新聞社

目

次

|           |     |
|-----------|-----|
| 彼女がさう叫ぶには | 3   |
| 五笑会の連中    | 24  |
| 夏の花咲く     | 51  |
| 触手        | 72  |
| 鮎料理       | 93  |
| 悪い日       | 114 |
| 自由を求めて    | 140 |
| その道に入る    | 175 |
| 都会の谷間     | 192 |

|             |                  |                       |             |             |                  |                            |                  |        |
|-------------|------------------|-----------------------|-------------|-------------|------------------|----------------------------|------------------|--------|
| 大<br>團<br>圓 | 檻<br>の<br>内<br>外 | 谷<br>間<br>の<br>暴<br>風 | 女<br>同<br>士 | 不<br>同<br>調 | あ<br>ら<br>く<br>れ | ふ<br>る<br>さ<br>こ<br>の<br>唄 | 地<br>下<br>の<br>人 | 乱<br>世 |
|-------------|------------------|-----------------------|-------------|-------------|------------------|----------------------------|------------------|--------|

414

378

347

330

307

290

267

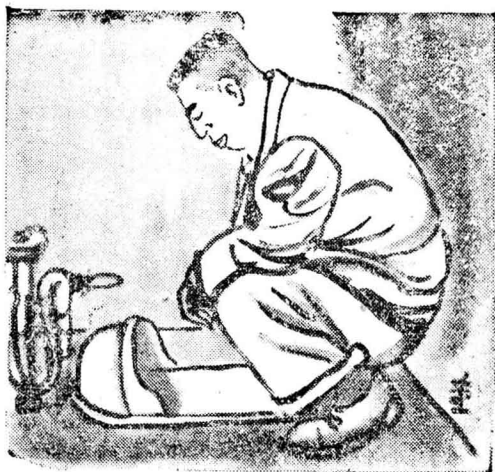
244

213

自由學校

獅子文六





## 彼女がさう叫ぶには

ガシャガシャガシャといふ音。ミシンの音といふものを、男性は、あまり好まぬやうだ。第一に、うるさい。そして、楽器よりも鋭敏に、使ひ手の感情を伝へるから、困る。

怒気を含んだ細君の脚が、ペダルを踏む場合、どんな、みごとな演奏をするか。それから、女性の自覚が、決して、戦後に始まつたものではなくて、ミシンが日本の家庭に普及されたのと、時を同じうするといふ見方も、捨てたものではない。とにかく、針箱の側で、妻が静かに手を動

かしてゐた時代には、家庭も、今よりは静かであつたことは、事實だつた。

「ねえ、出かけなくて、いゝの」

あの雑音を、スリ抜ける声だから、相当、カン高い。光る声でまた、刺す声である。細君の驕子——満算へなら三十を越すか、越さぬか。白地に黒の棒ジマの、肩衣のやうに、袖の切れたホーム・ドレスを着て、ミシンを踏む足は、ハダシである。これは、陽気がいゝため、身だしなみの問題ではない。少しは、ダラシのない方が、良人は助かるのであるが、万事、これほど整理の行届いた女も少い。ムダを知らない女である。体つきも、ムダな肉と背丈を拒んで、程のいい小作りだが、頭デッカチでも、胴長でもなく、内巻きにした黒髪も、豊かではあるが、毛深い方ではない。顔にしたつて、無用に大きい道具は一つもなく、眼がクリクリと強いのを、やゝ反つた鼻の愛嬌が救ひ、男のやうな口許と、ビスケット色に焼けたはだが、典型的美人となつて、同性に恨まれない用心をしてる。すべてが活用されてる顔で、もしムダを探したら、両眼の下に、少しばかり散在する、ソバカスぐらゐなものだらうか。

頭の働きの、ムダがない。

「十一時を、七分過ぎたわよ」

側目もふらず、ミシンを踏みながら、背後の本箱の置時計が、指さしてゐる時間を、正確にひ当てる。その本箱には、十九世紀の英文学から、戦後紹介されたアメリカ作家まで、原書や訳本が詰まつてる。皆、彼女の蔵書であつて、良人のあづかり知るところでない。しかし、彼女は良人が家にゐる時、読書にふけるやうな女ではなく、ミシンでもかけて、内職の子供服を仕立て

ると同時に、その騒音で、良人を勤めに追ひ出す同時作業を、毎日の習慣とすることを、知つてゐる。

二間しかない離れ座敷、むしろ納屋といつた方が適當な、粗末な住みである。日と雨に反り返つた濡れ縁に、良人の南村五百助が、大きな体を長々と寝転んで、日向ボッコをしてゐる。五月の末で、日向ボッコの陽気ではなく、満身に汗をかいてゐる。すり切れた綿ネルのパジャマも、暑苦しいが、さういふことを、一向、苦に病む気色が見えない。恐らく、真冬に始めた習慣を、打ち切りにする意志も、神経も、持合せない男なのだらう。細君が、何度声をかけても、返事をしないのも、同様の原因かも知れない。

ミシンの音がピタリと止んだ。

「あなた、眠てゐるの」

「いや……」

空井戸の底から響くやうな声だつた。

「眠てないんなら、返事なさいよ」

「してゐるよ」

「十一時過ぎたつて、いつてゐるぢやないの」

「あゝ、知つてゐる」

「知つてゐるなら、サッサと支度して、出かけたら、いゝぢやないの」

「うん」

と、いつたものゝ、五百助は、微動もしなかつた。まつたく、無感動の状態である。恐ろしく大きな図体で、松の木のやうに太い首筋を見せながら、打伏せになつてゐるが、着古した綿ネルのバジャマは、灰色に色がついて、肩、背、シリと、偉大な起伏を描き、鳥取海岸の砂丘と、異ならない。人体といふよりも、自然の一部を連想させる。むしろ、自然そのものが、横たはつてるとしか思へない。自然が感動しないやうに、彼も、感動はご免なのであらう。

「そら、また、悪い癖を始めたね」

ミシンが、再び動き、カン声が、また磨ぎ出される。

「一体、あんたつて人、さうやつて、落つき払つてゐるのを、優秀とでも、思つてゐるんぢやない？ それ、非常に、滑稽なのよ。バカみたいなことなのよ」

「さうかね」

五百助は、眠さうな、声を出した。返事をしなければ、うるさいことになるから、声だけ出したのだが、腹の中では、批評の如きことを、行つてゐる。

—— ずるぶん、下品な口をきくやうになつたな。戦前は、あんな女ではなかつた。やはり、境遇のせひだらう。

「さうよ。バカみたいなことよ。さういふ愚劣ほど内容のないものはないのよ。風船爆弾のやうに、主体性のない、東洋的気休めなのよ。それを、ご当人は……」

その辺から、五百助は、耳を傾けなくなつた。もつばら、ミシンの音だけを聞きながら、暑苦しい日光浴を、愉しむことにした。

この夫婦が、一緒になつたのは、昭和十六年の十一月で、戦争の起る二十日ほど前だつた。相当、世の中は窮屈になつてゐたが、それでも帝国ホテルで披露をした時には、シャンパンも抜いたし、結婚式菓子も出た。いや、五百助の生れた南村家が、まだ、そんな無理を押せるだけの社会的勢力を持つてゐたのである。満洲交通の副總裁だつた彼の父は、その頃もう死んでゐたが、その会社の持株と、賢夫人の母と、亡父の子分たちが支へてくれる家運は、まだ、少しも傾いてゐなかつた。昼ネオンとか、動かない置時計とか、蔭口をきかれる五百助ではあつたが、誰も、南村家の将来に、不安を抱く者はなかつた。

それが、この有為転変である。中央線の武蔵間駅むさしはざまから、二十五分も歩かねばならぬ、こんなヘンビな所に、農家の離れ座敷を借りて、二人きりのわび住ひを始めたのも、勿論、戦争のためだが、委細は後にして――

「ちよいと、ちよいと……もう、いゝ加減にしたら、どう？」

駒子の声が、五百助の耳の端で聞えた。ミシンを離れて、側へ寄つてきたとすると、少し厄介なことになる。

矢庭に、手が伸びて、五百助のパジャマの襟にかゝつた。すると、猫がつまゝれたように、十二貫の巨体の上半身が、スルスルと、もち上つたから、不思議である。心理が物理を支配する例は、家庭では稀でない。

「さ、お出かけなさい」

あくまで、冷静な声であつた。

五百助は、眼をまたゝきながら、アグラをかけた。明るい外光を受けて、顔が真正面を向いたが、これは、珍らしい人相だつた。

もう、めつたに、こんな顔には、お目にかゝれないのである。日蓮上人とか、西郷隆盛とか、精神力にあふれた英雄でなくては、こんな、黒毛虫のやうな眉や、コッペ・パンのやうな鼻や、懷中電燈が二つ輝いてるやうな眼や、ハンバーク・ステーキのやうな唇や、それらを一切台財を包含して、なほ、球場の外野ほどの余白を感じさせる顔の大きさを、持つてはゐないのである。しかも、そんな大きな頭部が、福助人形的な不安定を感じさせないのみか、むしろ、鉄瓶の蓋のツマミのやうに、小さく見えるのは、どういふものか。もつとも、五尺八寸の体と、二十二貫の肉との比例も、考へねばならぬが、そのみの理由ではないらしい。

とにかく、大人物の人相である。日蓮上人の木像、西郷隆盛の銅像を見ても、頭部は、皆、小さく見える。頭部は、問題でない。そこで、誰も、南村五百助の肉体に、威圧されてしまふのだが、細君の駒子とか、亡くなつた母親の秋乃とかの近親者は、彼の巨大な目鼻立ちの奥にあるものを、悲しげに、認知してゐた。なにも、巨大なるものがないのである。といつても、シミッタレタものも、ないのである。結局、なにもないといつた方が、早いのである。

彼は、学習院から京大を出て、長いこと遊んでゐたが、結婚の年に、亡父の子分の世話で、東京通信社へ就職した。最初は、通信社でも、この大人物的肉体をどう扱つていいか、困つたらしい。まづ、運動部に配されたのも、その頃、最もヒマな部であつたことの外に、肉体は肉体を知るとでも、早合点されたのだらう。

ところが、五百助は、幼い頃から運動嫌ひで、どんなスポーツにも手を出したことがなく、きつたく、知識と神経を持合せないのである。彼の年頃で、野球のルールも知らないといふことは、珍らしい話である。剣道やラグビーは、最も好かないスポーツだが、それは、人と争つて、勝たねばならぬ点が、露骨だからだつた。

彼は、人と争ふことが、何より嫌ひだつた。これだけの巨体だから、腕力は相当あるにちがひないが、生れてから一度も、それを振るつたことがない。喧嘩といふものも、曾て、経験がない。巨体に恐れて、人が喧嘩しかけぬからでもあらうが、彼自身が、そのやうな危険に、立ち寄らぬからである。

彼は、運動記者は不適任と知つてゐたが、それを、口に出せる男ではなかつた。そして、皮切りに、第七回日本体操大会に、先輩記者に連れられて行つたが、つまらぬ失敗を演じた。

五〇〇〇の長距離競走を見てゐるうちに、彼はすつかり退屈して、外苑スタジアムの便所へ行き、長いことシャガんでゐた。あるひは、多少、眠つてゐたのかも、知れない。もう、レースも済んだ頃と思つて、外へ出ようとしたが、どういふものか、ドアが開かなくなつた。彼の力で、体当りでもすれば、ドアぐらゐは訳なく開くのだが、それを敢てる男ではなかつた。彼は、隣の便所に人が入るのを、根気よく待つた。やがて、その機会が訪れると、壁越しに話しかけた。「済まんですが、丸の内の東京通信社へ、電話かけてくれませんか。社の者が、こゝへ閉ちこめられて、出ることができない、とね……」

愚かな頼みであるが、それを、正直に取次いだのは、善良な中学生で、もあつたらうか。東京

通信社では、二人も記者が行つてゐるのに、そのやうな電話をしてくるのは、なにかの變事が起つたかと考へ、社旗を懸へした車を飛ばして、屈強な社員が駆けつけたのだが、実に開いた口がふさがらなかつた。

それ以来、五百助は、社内で有名な人物になつたと同時に、運動部から、最もヒマな通信研究室といふのに廻されて、いつまでも、そこを動かなかつた。彼の紹介者が、社の有力な幹部でなかつたら、とうに、クビになつてゐる筈だつた。

彼は、運動部に向かないばかりでなく、機敏を要するジャーナリストそのものに、まづたく資格を欠いてゐるのである。それならば、勤人、商人、軍人、弁護士、芸術家等のどれかに、向いてゐるといふと、どれもこれも、考へたゞけで、ムリな相談といふ気がする。どうやら、彼に勤まる職業といつたら坊主かも知れない。それも役僧や小坊主は、それぞれ仕事があるから、適当でない。一山の和尚でなければ、ダメである。働かず、主として、茶でも飲んでる商売がいゝのである。そんな、うまい職業が、あるものではない。つまり、彼は、「職業」に適さざる男なのである。

五百助は、よい家庭に育ち、稀な賢母の翼の下に温められ、そして、今は、無類に有能な妻の駒子に、一切を支配されて、生きてゐる。駒子は、ある女子大の英文科を出て、英語が達者であるから、近所の農村戦後青年女子に、英語を教え、または、進駐軍関係の翻譯の下仕事をやるばかりでなく、編物でも、アクセサリの製作でも、洋裁でも、先刻まで、土砂降りの音を立てゝゐたミシン仕事でも、直ちに、工賃にかへ得る技能を、持つてゐる。その他、料理の工夫にしろ、家

計のヤリクリにしる、普通の奥さんでは、足許にも寄れない腕前の持主なのである。

彼女とても、生れながら、今のやうな女でもなかつた。上流といはれる社会の空気も、吸つたことのある女だが、娘時代に、父が疑獄事件で失脚したのが第一幕の暗転、お次ぎが、五百助と結婚後の南村家没落で、パッと暗くなつて、舞台の変る経験を、二度も味つた結果が、彼女をこんな有能な女にしてしまつたのである。

憂きことのなほこの上にもれかし、限りある身の力たぬさん——作者が幕末志士だとすると、まつたくカビの生えた歌だが、可能性の限界を究めるといへば、自殺した有名な戦後青年の心境だつた。

南村駒子なども、逆境に立てば立つほど、有能な素質を発揮する。一種の意地であらう。また、生れもつた気質と体質のせみだらう。彼女の側へいくと、カッカと、血だか、魂だか知れぬものの、火照りを感じる。年中、燃え続けてゐる、ストーブのやうな女である。気が勝つてゐる、といふぐらゐの表現で、追ひつく女ではない。

そこを見込んだのが、五百助の賢母だつた、秋乃刀自である。

「あゝいふ男ですから、あなたの長男だと、おぼしめして……」

婚約時代に、彼女は、駒子にさういつた。意味深長の言で、将来、夫婦になつて、子が生れても、それとは別に亭主を大きな子供だと思つて、面倒を見てくれ、といふのである。いひかへれば、五百助といふ男に、男性もしくは良人として、愛情や尊敬の起るのを期待しても、ムダかも